

八五郎の恋

野村胡堂

一

「親分、近頃つくづく考えたんだが——」

ガラツ八の八五郎は柄がらにもない感慨無量かんがいむりような声を出すのでした。

「何を考えやがったんだ、つくづくなんて面つらじゃねえぜ」

銭形平次は初夏の日溜りを避けて、好きな植木の若芽をいつくしみながら、いつもの調子で相手になっております。

「大した望みじゃねえが、つくづく大名になりてえと思つたよ、

「親分」

「何？ 大名になりてえ、大きく出やがったな、畜生ッ」

平次はそう言いながら、ふうりん楓林仕立てのほんさい盆栽の邪魔な枝を一つ
チヨンと剪きりました。

「第一、お小遣いに困らねえ」

「なるほどね、大名衆がお小遣いに困った話はまだ聞かねえ」

平次もそんな事を言うのです。植木に夢中になって、八五郎の
哲学などは、どうでもよかつたのでしょう。

「お勝手元不如意と言ったところで、こちとらのように、八文の
湯銭に困るなんてことはねえ」

「よほど困ると見えるな、八」

「へエ、お察しの通りで」

八五郎は、ポリポリ頸筋を搔きました。

「呆れた野郎だ。大名高家を引合に出して、八文の湯銭をせびる奴もねえものだ」

そう言いながらも平次は、お静を眼で呼んで、あまり沢山は入って居そうもない自分の財布を持って来させるのでした。

「済まねえ、親分、湯銭と髪銭と、煙草を一と玉買いさえすりやいいんで、——そんなに要りやしませんよ」

「まア、取って置くがいい。大名ほどの贅ぜいは出来めえが、それだ

けありや、町内の人参湯で一日茹ゆっていられるだろう」

「へッ、済まねえなア、——それじゃ借りて行きますよ。ね、親分、お小遣はまア、親分から借りるとして」

「まだ不足があるのかい」

「大名の話の続きだが、——夏冬の仕着しきせにも不自由はなく」

「仕着せだってやがる」

「質屋の出し入れがないだけでも、どんなに気が楽だか解らねえ。

その上、出入ではいりはお駕籠、百姓町人に土下座をさせて、気に入らね

え奴があると、いきなり無礼討だ」

「気に入った女は、いきなりしよ、つ引いてお部屋様だろう」

「そ、それを言いたかったのさ、ね、親分」

ガラツ八は少し相好そうごうを崩して長い顎あごを撫でます。

「馬鹿野郎、また何処かの小格子の化け損ねた狐のようなのは
まり込みやがったんだろう」

「そんな玉じゃありませんよ。あつしがしよつ引いて来たいのは
先ず——」

「煮売屋のお勘子だろう、ちゃんと探索が届いているよ。手前てまえが
買いに行くと、お煮にしめべが倍もあるんだってね」

「馬鹿にしちやいけません。あんな小汚いのはこちらで御免だ——
まずこの八五郎がしよつ引いて手活けの花と眺めたいのは——」

「大きく出やがったな」

「横町の中江川平太夫の娘お琴さん^{こと}」

「わッ、助けてくれ」

平次は大仰な身ぶりをしました。横町の中江川平太夫というのは、北国浪人で六十幾つ、髪が真白な上、進退不自由の老人ですが、界限切つての物持ちで、その上、養い娘のお琴は、少し知恵は足りないと言われておりますが、見てくれだけは、凄いほどの美人でした。

これ位の娘になると、ガラッ八とは大釣鐘おおつりがねに提灯で、どう間違つても一緒になれっこはありません。ガラッ八が冗談の題目に

したのも、平次がすつ頓狂な声を出したのも、掛け合いぼなし嘯程度以上のものではなかったのです。

二

その頃、神田、日本橋、下谷へかけて、通り魔のように荒し廻る兇賊がありました。

仲間という者を持たぬ、たった一人の仕業のようですが、梁はりを渡り、ひさし庇を伝い、天窓を切破り、格子を外し、鼠いたちか鼯いたちのように忍び込んで、人を害あやめ、財かすを掠め、姿も形も見せず煙の如く消え

てしまうのです。

腕も抜群ですが、何よりの特色はその軽捷な身体けいししょうで、もう一つの特色は、妨さまたげる者は殺さずんばや已まないと、鬼畜きこくの如き残虐性ざんぎやくせいでした。

盗られた金は何千両、傷きずつけられ、殺された人も三人や五人ではありませんが、あまりの神出鬼没ぶりに、銭形平次も手の下だしようがなかったのです。

町内では、夜廻りを増ふやし、時候外れの火の番をおき、鳶とびの者まで動員して、曲者狩に努めましたが、冬からの跳梁ちようりようを指を啣くわえて眺めるばかり、嘗かつて曲者の姿を見た者もなく、よしんば見た者が

あるにしても、その場で斬られるのが落ちで、怨嗟と恐怖が、下町一パイに、夕立雲のように拡ひろがって行くのを、どうすることも出来ない有様でした。

「親分、やられましたよ」

八五郎が飛込んで来たのは、その翌日の朝。

「何がやられたんだ」

「中江川さんのところへ、あの泥棒が入りましたよ」

「えッ、そいつは大変だ」

平次は羽織を引っかける隙もなく、草履を突っかけて飛んで行きました。其処からほんの二三町。

「退どいた退いた、見世物じゃねえ」

ガラツ八が群がる弥次馬を追っ払う中へ、平次は熱い物がさめない中に——と言った大あわての調子で飛込んだのです。

「あ、銭形の——よく来て下すった、この通りの始末だ」

おろおろするのは、主人の中江川平太夫、見事な銀色の毛を申訳ほどの鬘まげに結って、物を言う度毎たびごとに、言葉のリズムに乗って、首がブルブルと顫えます。

「あッ、これはひどい」

切り破られた引窓、そこから例いつもの手で、紐を伝わって、猿ましらの如く忍び込んだ曲者は、ちょうど、目を覚まして飛起きた、娘のお琴

を一と当て、猿轡ざるぐつわを噛ませた上、雁字がんじがらめにして、そのまま家中を捜したのでしよう、滅茶滅茶にかき乱した中へ、朝の光がうらうらと射し込んで、世にも不思議な対照を見せております。

平次はまだ縛られたままになって居る娘のお琴を引起すと、菜な切庖丁きりを持って来て、バラバラと縄を切りほぐし、それから猿轡ざるぐつわを取って、

「どうなすった、お嬢さん、——飛んだ災難でしたね、——見たこと聞いたこと、詳しく話して下さいな」

ガラッ八に雨戸を開けさせ、乱れた娘の衣紋まで直してやりながら、平次は物柔かに問い進みました。

「何にも知りません、——気が付いた時は床の中から引出されて、こんなに縛られておりました」

「引窓をコジ開ける音とか、此処へ入って来る様子とか、——そんなものに気が付きやしませんか」

「いえ」

娘は美しい顔を上げます。気が緩ゆるんだせいとか、恥かしい姿を、平次やガラツ八の前にさらした口惜くやしさのせいとか、ポロポロと涙が、睫毛まつげをあふれて、少し蒼ざめて居りますが、それでも、存分に豊かな若い頬を濡らします。

年の頃、せいぜい十九、二十歳、無表情で整い過ぎて、少し白はく

痴美ちびに近い美しさですが、魂の通った人形を見るようで、それがまた限りない魅力でもあります。

寝巻の上へ袷を引っ掛けて、その上からキリキリと縛られてい
る様子を見ると、暁方夢中で小用にでも起きたところを曲者あてに当
身みを喰わされ、そのまま縛り上げられた顛倒のうちに、後も先も
忘れてしまったのでしよう。

「それにしても、私が来るまで、よく縄を解かず置いてくれま
した」

平次は結び目を残して切った細引を、そのまま自分の袖に落し
ながら、中江川平太夫かえりを顧みました。

「何かのお役に立とうと思つてな、縄を解いたり、雨戸を開けたりしちや、証拠を皆な掻き消すようなものだから」

平太夫は老巧らしくそう言うのです。

「ところで、盗られなすつたのは？」

「大したことではない。当座の小遣のつもりで、出して置いた十二三両と、明日本郷の地所を求める約束で、用意した手付てつけが五十両、合わせて六十二三両ほどじゃ、——そんな事で済むなら、世間を騒がせる迄もないと思つたがな」

大したことではないと言うのが六十何両、この浪人の裕福さは、予かねて聞いておりますが、八文の湯銭に困つたガラツ八は、顎を撫

でながら平次と顔を見合せます。

「あなたは、何にも御存じなかったの？」

さんざん荒らされた部屋の中を見廻しながら、平次はこの頼み
少い老人を見やりました。

「耳も眼も遠いから、滅多なことでは気がつきませんよ、——尤
も気がついて、なまじ腕立てなどをしたら、私の身体が危なかつ
たかも知れない」

「——」

心細い侍——そんな事を考えながらも、ヨボヨボの中江川平太
夫を非難する気にはなれません。

「こんな事を言つては変だが——いや、平次親分だから言うが、金の在^{ありだか}高が知れると私の命がないかも知れない。わずか六十両や七十両で済めば、——」

中江川老人はそう言つて、真白な頭をブルブルふるわせるのでした。

曲者の入った跡から、逃げた出口まで、平次は入念に見廻しました。物置の後には九つ梯子^{ぼしご}があるのに、曲者はそれに氣のつかなかつたものか、物干場から物置の屋根に上り、そこからお勝手の上へ出て、引窓をコジ開けて入つたのは、この曲者の手形のような手順です。

庇の上は埃ほこりで汚くなっているのに、家の中に足跡のないのは、

用心深く履物はきものを懐へでも入れたのでしよう。お琴を縛って、次の間を荒し抜いた上、主人平太夫の寝間は覗いても見ずに、そのまま縁側から出たのは、年を取っても二本差などには触れない、いかにも賢いやり口です。

「脅おどかすわけじゃありませんが、この様子じゃ、もう一度入るかもわかりませんよ」

平次は一と通り見た上で、こんな不気味なことを言うのでした。

「そんな事は？」

中江川平太夫はさすがにギョツとした様子です。

「用心なすって下さい」

「私はこの通り身体がきかないから、氣ばかりあせっても、何の役にも立たない。女子供じゃ、泥棒の入った後へ来るのは氣味が悪いだろうし、——若い者じゃ、娘があるから泊めるわけに行かない。お氣の毒だが平次殿、しばらく此処へ泊っては下さらぬか、錢形の親分御宿と聞いたら、石川五右衛門でも寄り付くことではあるまい」

そんな洒落しゃれを言いながらも、中江川平太夫は泣き出しそうでした。

「そんなわけにも参りませんが、どうでしょう、この男を泊めて

下すつちや、——年は若いが、これなら女護じょごガ島へ転がしておいても大丈夫で」

平次はそう言いながら、ニヤリニヤリとガラツ八の鼻を指すのです。

「親分」

驚いたのは八五郎でした。

三

その晩から、ガラツ八は中江川平太夫の家に泊り込むことにな

りました。家が広いので、奥へは主人の平太夫、お勝手の側の居間にはお琴が一人、ガラツ八は店を直して格子をはめた表の部屋に宵から暁方までもぐり込むことになったのです。

大名の話から、お琴の噂まで出た後で、ガラツ八も最初は渋りましたが、向柳原の叔母の家においても、親分の平次の家においても、居候に変わりはないのですから、結局晩酌と御馳走と、お琴の美しさを満喫するのが景物で、少しは良い心持にウカウカと二三日過してしまいました。

それは四日目の朝。

「八、両国まで一緒に来いッ」

「応おうッ」

めずらしく平次に誘さそわれた八五郎は、少し極り悪く中江川の家から飛出し、平次を追って一気に両国まで。

「何かあったんで？ 親分」

「広小路の酒屋へ入ったよ」

「へエ——」

「手口はいつもの通り、庇ひさしを渡って天窓から入り、手代が一人斬られて、盗られたのは百両ばかり」

そんな事を言ううちに、二人は弥次馬に取囲まれた酒屋——ます枡屋や伝七——の前に立って居りました。

「親分さん、大変なことになりました。この通り」

飛んで出たのは主人の伝七です。指さした方を見ると、ひさし庇に掛けた梯子、最初はそれを渡って楽々と天窗をコジあげ、隣の部屋にいた手代を虫のように殺して、次の間の用筆筒ようだんすから百両余り入った主人の財布を盗って逃げた——と思われました。

しかし、不思議なことに、此処でも、梯子は庇に掛けたまま使った様子はありません。横木に少しの泥も付いては居ず、二本の脚が、柔かい土にメリ込んでも居ず、梯子を掛けた竹の古い雨樋も、少しも傷んではいなかったので。手代は、寝たまま喉を刺されて、夢から死への無慙な往生を遂げたらしく、凄まじい血潮の外

には、何も変ったものはありません。

「この泥棒には人間の心が無い」

平次はツクツクそう言いました。今までの手口から見て、無恥むちで、残酷で、手加減も遠慮もないところを見ると、どう斟酌しんしゃくして考えても、人間らしい心の持主とは思えなかつたのです。

「隣は？」

「空家でございます」

「その隣は？」

「かるわざ軽業の小屋で」

「行って見よう、八」

平次はガラツ八をさし招くと、路地を拾って、軽業小屋の裏木戸から入りました。

「御免よ、——誰か居ないのかえ」

「へエ——」

ヌツと顔を出したのは、五十年配の人摺すれのした男。平次とガラツ八の顔をまぶしそうに眺めます。

「ここに誰と誰が泊すって居るんだ」

「へエ——」

五十男の顔から、不敵な忿懣ふんまんが消えると、それが次第に恐怖になつて行く様子です。

「俺は神田の平次だ。朝早くから気の毒だが、ツイ其処に人殺しがあつたんだ。念のため小屋に泊っている男の顔を見ておきたい。皆なここへ呼出してくれ」

「へエ——」

錢形の平次と気が付くと五十男はアタフタ小屋の中に駆け込みます。

後で解つたことですが、これが木戸番の三太。その声に応じて、ゾロゾロと出て来たのは、太夫元の権次郎、竹乗りの倉松、はやしかた囃方の喜助、それに女が二三人、朝といつても、かなり陽が高くなつているのに、思い切つて自墮落じだらくな風を、ズラリと裏木戸に並べた

ものです。

「親分さん、何かよくねえことがあったそうで」

権次郎は四十男のしたたかげな額を撫でて、ヒヨコヒヨコとお辞儀をしました。

「全くよくねえ事だよ、枡屋の手代が殺されて、百両ばかり盗られたんだが、泥棒はこの小屋の庇ひさしから、空家の屋根を伝わって、枡屋の庇へおり、天窗をコジ開けて入っているんだ」

「へエ——」

「板庇こわが毀れて、木端こっばが路地に落ちているから、その見当に間違いはねえつもりだ。ところで、この小屋の庇から、隣の空家の屋

根までは一間半はあるだろう、あれだけ無造作に飛付ける人間は、ここに幾人いるんだ」

「――」

権次郎は黙ってしまいました。その後ろに蒼くなつて顫ふるえているのは、竹乗りの名人倉松、地上三間あまりのところを庇から屋根へ楽々と飛移る芸当の出来るのは、軽業小屋の中にも、この男の外にはありません。

「倉松とか言ったね、竹乗りは鮮あざやかだということだが、ちよいと身体を見せてくれ」

「へエ――」

平次は、ガラツ八に眼配せすると、二人がかりで、倉松の身体を調べました。あわてて絆纏はんでんを引っかけて、襟も裾も合つては居ませんが、他には別に不審の廉かどもなかつたのです。

「ゆうべ寝た場所と、お前の荷物を見せて貰おうか」

「――」

黙って案内したのは、汚い楽屋がくや。男たち三四人はそこに雑魚寝ざごねをする様子で、まだ床も敷きつ放しですが、何の変つたところもなく、倉松の荷物という、小さい竹行李たけごうりを、引くり返して調べたところでも、着換えの袷の外には何にも出て来ません。

平次はがっかりした様子で外に出ました。

四

「親分、あてが外はずれましたね」

ガラツ八、犬っころのようにその後に従います。

「外れるものか——皆な思つた通りだよ」

「だって何にも証拠はないじゃありませんか」

「証拠はあり過ぎるよ」

「へエ——」

「たとえば、これだ」

平次は裏木戸の外ちよつとの一寸人目につかぬ物蔭しやがに踞むと、泥と血に塗まみれた、ヒ首あいくちを一口ふり持って来ました。

「おや？ そいつは何処に？」

「溝板の隙間に打ち込んであつたよ」

「それじゃ、あの野郎だ。しよつ引いて行きましようか」

「待て待て、少し臍ふに落ちない事がある」

平次は元の小屋に引返すと、そのヒ首あいくちを皆なに見せました。

「小屋の道具でないことは確かで——第一、そんなによく切れるのは危なくて、舞台へ持出せやしません。尤も、銘々めいめいどんなドスを隠して持っているか、それまでは解りませんが——」

権次郎の言うことは一向取止めもなかったのです。

「ここの演^だし物に、縄抜けがあつた筈だが」

平次は不思議なことを訊きます。

「それは、倉松の十八番でございますよ」

権次郎はこの上もなく無造作な調子でした。

「抜けるのは倉松だろうが、縛るのは誰だい」

「お客に縛って頂きます。——お客が引込み思案で出て下さらない時は、三太がやりますが」

「ちよいと、此処でやって見てくれ」

「へエ——」

権次郎も倉松も変な顔をしましたが、銭形平次の望みに^{そむ}反きようもなく、舞台上で使う細引を持って来て、木戸番の三太の手で、キリキリと倉松を縛って見せました。

「もうそんな事でよからう、抜いて見てくれ」

「――」

倉松は何か襲われるような心持らしく、引っ切りなしに平次の顔を見ております。これが、何時^{いつ}、本繩に変わるかも知れないと思うのでしよう。

でも、二度平次に催促^{さいそく}されると、芸人らしく、はっきり見得を切って、

「え——ッ」

気合が一つ、縄はゾロゾロと解けて、死んだ蛇のように、倉松の足許に這います。

「御苦労御苦労、それでいい、——飛んだ邪魔をして済まなかつた」

平次は、丁寧に礼さえ言つて、小屋の外へ出るのでした。

「親分」

暫らくすると、ガラッ八はたまり兼ねた様子で声を掛けました。

「何だい、八？」

「倉松の野郎を縛らないんですか」

「無駄だよ」

「？」

「縄抜けの名人だ、縛るだけが野暮さ」

「へエ——」

「それに倉松は縄を抜けるのが渡世とせいで、縛る方は得手とせじゃなかつたんだ」

ガラツ八は、不服そうに頬を膨ふくませます。

「それより、あの娘の方はどうした？」

平次は話題を変えました。

「娘？」

「知らばつくれちゃいけねえ。中江川のお琴さんだよ。用心棒に手前をおくのは何の為だと思ふ」

「――」

ガラツ八の顔は見物です。

「あきれた野郎だ、若い娘と三日も四日も鼻を突き合せているくせに、まだ埒らちが明かねえのか」

「親分」

「手前は、あの娘を女房にしたいって言ったろう。だから、俺は粹すいをきかして、手前を用心棒にしてやったのさ。中江川さんは年寄で、眼も耳も遠いから、三日経たないうちに、手前とお琴さん

は、夫婦約束くらい出来るだろうと思つたんだ。——相惚れの仲なこ
人実うどは廻し者——つてね、それから俺が乗出して口をきくのさ」
平次はそんな事を、面白そうにまくし立てるのです。

八五郎の恋



©2017 萩 柚月

「だって無理だよ、親分、ああ見えても武家の娘だ」

「武家の娘が何だい、——それともお琴さんが二本差しているとしても言うのかい」

「弱ったなア」

「弱ることなんかあるものか、——どうせ年寄は早寝だろう」

「そりゃ、宵には奥へ引込むが」

「それから手前へ晩酌ばんしゃくが出るだろう、——酔った勢いで、何とかならないものかね」

「あれでも武家の娘だ。綺麗なだけで大した伶俐れいれいじゃあるまいと思つたが、どうしてどうして」

「手前より伶俐だと解ったのかい、ハッ、ハッ、ハッ、ハッ、こいつは大笑いだ」

何が面白いのか、カラカラと笑う平次。その羽目はずした調子を、ガラツ八はムツとした心持で見詰めるのでした。

五

それから三日の間に、兇賊は三カ所を荒し廻りました。質屋と、呉服屋と、女隠居と、——中でも末広町の女隠居は、あんまり金を深くしまい込んで、くせものさすがの曲者も捜し兼ねたものか、叩き起

して刃物で脅かし、落しの中の石畳の下にあった、百二十両の小判のありかを言わせてしまいました。

その時、曲者の姿を、臃ろ気ながら見てしまった女隠居は、危うく殺されるところでしたが、曲者は暁近い外部の人通りにおどろいて逃出し、すでに刃を喉笛に擬せられた女隠居は、危ういところで命を助かったのです。

平次とガラツ八が、朝のうちに駆け付けて、まだ驚きと怖れからなお切りぬ女隠居の口から、一生懸命訊き出したことは言うまでもありません。

女隠居は、六十前後、嘗ては日本橋あたりのお店の主人の囲い

者だったそうで、下女一人を使つて、つつましく暮しておりました。

昨夜はちょうど下女を葛西かさいの在所に歸して、たった一人淋しく過していると、夜中過ぎに、天窓をコジあけて、覆面ふくめんの大男が入つて来たというのです。

「大男——？ それは本当かい」

「へエ、大きな男でございましたよ。頭巾を冠ったままで、よくは解りませんが、声の様子ではまだ若そうで」

「下女は長く奉公しているのかい」

「五六年も居りますよ。大の忠義者で、まだ三十そこそこでしょ

う。一度縁付いたそうですが、不縁になって私のところへ参り、もう一生動かないといつて居るくらいで、へエ」

「葛西かさいの在から、使でも来たんだろうな」

「口上で、——母親が加減が悪いから一と晩泊りでも来るようにと、百姓衆が言つて来ました」

「下女の知っている人かい」

「いえ、村の人じゃない——と言いました」

こんな事は、いつまで訊ねて居ても際限ありません。いずれは偽使に決つて居るようなものです。

「昨夜ゆうべの事を、もういちど詳しく話くわして貰おうか」

平次は女隠居の言葉を、くり返して検討する積りでしよう。

「このつ子刻が鳴ってから寝付きましたから、やつ丑刻近かったかも知れません。変な音がして眼が覚めると有明の行燈の前に、真つ黒な男が立って居るじゃありませんか」

「確かに男だね」

「それはもう親分さん、——飛起きて声を立てようとするえりくびと襟頸を押えて枕に仰向に押付けられ、喉笛を脇差でピタピタと叩くじゃありませんか」

その時の事を思い出したか、女隠居はゾツと身を顫わせました。「何にも物を言わなかったのか」

「——金を出せ——ただそれだけです。何にも言いません。それつきり黙りこくって、四半刻もジツとして居るんですもの、命より惜しい虎の子だって隠し切れるものじゃありません」

奪い取られた百二十両の惜しさが、身に滲しみみたまものか、女隠居はこの時はじめてポロポロと涙をこぼしました。

「声は？」

「低い声で、——聞いたことのあるような、ないような——」

「——」

「仕方がないから、落しの中の、石畳の下に、虎とらの子を隠してあることを言いました。すると、私の胸倉を掴んだまま行って、落

しを開けて黄八丈の財布に入れた、百二十両の小判を取出し、憎らしいじゃありませんか、ゆうゆうと勘定までして自分の懐ろに入れ、それから元の部屋に帰ると、もういちど脇差わきざしを抜いて、この私を——」

女隠居は自分の喉のあたりを指しながら、恐怖に絶句したのです。

「それから」

「どうせ、姿を見られると、決して助けては置かない泥棒だと聞いていたので、私も観念しました。——観念したくないにも、声が出なかったのです。思わず念仏を称えると、泥棒はあわてて私

の胸倉を突放し、蒲団の中へ私を押込んで、裏口から飛ぶように
逃出してしまいました」

「外で物音でもしたのかい」

「物音がしたかも知れませんが、私には聞えません。私はもう生
きた心地もなかったもので、聞き落したのでしょう。泥棒があんな
にあわてたところを見ると、人声か足音か、何か聞えたに違いあ
りません」

「時刻は？」

「間もなく丑刻半やっだったと思います」

「暁方と言っても、まだ人の通る時刻ではないな」

平次はいろいろの事を考えている様子でした。

「どうしたらいいでしょうね、親分さん。あの百二十両を奪られてしまつては、私はもう明日から暮しようがありません」

女隠居は命に別条のないことをはつきり意識すると、次第に盗まれた百二十両が惜しくなったものらしく、頼み少ない姿で、悲嘆にくれるのでした。

「泥棒はきつと捉つかまえてやる、——もう少し落着いて、俺の言うことを聴いてくれ」

「——」

「泥棒の足を見なかつたかい、何を履はいて居たか」

「はだし跣足でしたよ。尤も懐ろへ草履か雪駄を入れて居るのがチラと見えましたが」

「八、聞いたか、泥棒は履物を懐中へ入れて居たとよ。以前は泥の付いた履物のまま、畳の上も蒲団の上も踏ふみ荒した泥棒が、この間から馬鹿にお行儀のよくなったのに、手前もてめえ気が付くだろう」

「そう言えばそうですね」

八五郎は一応うなずきました。が、それはどんな意味のあることか解りそうもありません。

「此処でも梯子はしごは使わなかつたようだな。ところで、お婆さん、外に気の付いたことは？」

平次はまだこの女隠居から引出せそうな気がしたのです。

「頭巾の下から、切り揃えた毛が少しはみ出して居たようですよ」

「何？ 頭巾の下から、切り揃えた毛？ さア大変だ、八？」

平次は躍り上がりました。

「そいつは何でしょう、親分」

「たしかに女でないなら、そいつは総髪そうはつだ。総髪そうはつにしている男と

いうと——」

「医者か、八卦けか、法印か——」

「しめたッ」

平次は新しい光明に臨んで、驀地まつしぐらに飛出しました。

六

神田から下谷日本橋界限に、総髮姿で身体の利きそうな男とい
うと、筋違すじかい見附外に大道易者あだちをしている、浪人大谷道軒の外には
ありません。

「八、下つ引を二三人呼んで来い、相手はうんと手剛いぞ」

「大丈夫ですか、親分」

「大概たいがい大丈夫なつもりだが、——念のため筋違見付を覗いて行こ

う」

二人は一気に筋違見附へ――。

そのころ筋違見附、今の万世橋の袂は、たもと丸ノ内、日本橋から、上野へ、甲州街道への要路で、警戒の嚴重なところであり、人出の多いところでもありました。

見附外の少し離れた空地、三脚の台を据え、眼鏡を構えた易者は、ときどき編笠を取って汗を拭きませんが、ぶしようがみ無精髪の総髪、まだ四十そこそこの屈強な男です。
くつきょう

「八、止そう」

平次は張り切った肩を落しました。

「どうしたんで？ 親分」

「総髪は江戸に何十人あるか解らねえ、迂闊うかつにあの易者を縛って、物笑いになるのもイヤだ」

「それじゃ、あの野郎の家へ行つて、家捜ししましょうか」

「家は何処だい」

「鍋町の源助店だなで」

「いやな事だが、それも仕方があるまいな、行つて見よう」

二人は鍋町へ引返しました。

源助店の路地の外に、ガラツ八を見張りにおいて、道軒の家へ潜もぐり込んだのは平次たった一人。

それから一刻あまり、近所の思惑をはばかりながら、平次は一

生一代のいやな家捜しを続けました。

何処にも、血の附いた脇差も、小判の片かけらもありません。天井も、床下も、押入も、蒲団の中も見ました。

「ありませんか、親分」

ガラツ八はたまり兼ねて入って来ました。

「何にもないよ、浪人者にしては、念入りの貧乏だな」

「その仏壇は？」

「盗んだ金を、入口から見透しの仏壇へ入れて、御先祖様にお目にかける奴もあるめえ、——が待てよ、外の考えようもある」

平次はもう一度ひき返すと、仏壇の中を念入りに見た上、下の

抽斗ひきだしも嘗なめるように調べました。

「おや？」

抽斗を抜いて、その奥へ手を突っ込むと、何やら指先に触れるものがあるのです。ズルズルと引出して見ると、

「親分」

八五郎は思わず喊声かんせいをあげました。黄八丈の財布が一つ、扱しごいて見ると、中から出たのは、数も百二十枚、ゆうべ女隠居が盗られたという小判まぎに紛れもありません。

「――」

平次は黙って考え込んで居ります。

「親分、見附へ行つて見ましよう。気が付いてずらかっちゃ一大事」

「騒ぐな八、まだ縛るには早い。去年の暮から諸方で盗った金はどう積つても千両以上だ。ここにあるのは百二十両、あとの金が出ねえうちは、滅多に縄を打つわけには行かねえ」

「だって親分」

「まア、いい、俺に任せておけ、——この事は人に言うな」

平次は黄八丈の財布に入った百二十両を元の引出しの裏に入れると、泥棒猫のように、そつと大谷道軒の浪宅を滑り出たのです。

それから二日目。

「ところで、八」

「へエ——」

平次のところへ行った八五郎は、妙にくすぐ擦ったい笑顔に迎えられました。

「あの娘はどうだえ」

「へエ——」

「まだモノにならないのか」

「ありやめがね鑑定違いですよ、親分の前だが」

八五郎は照れ臭く頸筋を叩きます。

「何が違ったんだ」

「あのお琴という娘は飛んだ喰わせものですよ」

「はてね？」

「第一、中江川平太夫の娘なんかじゃありません」

「へエ——」

「二三日は娘らしくして居ましたが、近頃じゃ——」

ガラツ八は頸を縮めて赤い舌を出すのです。

「孫まじかい、娘でなきや——」

と平次。

「親分もどうかして居ますぜ」

ガラツ八の鼻の穴は次第に大きくなります。

「何がどうしたんだ」

と平次。

「不思議なことばかりで、あつしには見当も付かねえ」

「何が不思議なんだ」

「第一、あの平太夫はそんな年寄りじゃありません、髪こそ真つ

白だが」

「そんな馬鹿なことがあるものか、第一ヨボヨボして、歩くさえ

不自由じゃないか」

「でも——」

「手前気が弱くてそんなつまらねえ事を考えるんだ。待ちな、俺が結構な禁呪まじないを教えてやる。今晚あの平太夫の前で、あの娘を嫁よめにくれと言ってみるんだ」

「そんな馬鹿なことが言える道理はありません。痩せても枯れても向うは武家で、此方はただの岡っ引だ」

「つまらねえ遠慮をするじゃないか。武家でも浪人だろう、手前は十手捕縄をお上から預かる一本立の御用聞だ」

「だって、あの娘は、あつ、しの事なんか、何とも思っちゃ居ませんぜ」

「居ないことがあるものか。大ありの名古屋だ、畜生ちくしょうめ奴ツ」

「痛いッ」

平次の手は威勢よくガラツ八の背をなぐったのです。

「それでも文句を言うなら、結納の代りだとか何とか、いい加減な事を言つて、これを見せるがいい」

平次は何やら風呂敷に包んだ品を、ガラツ八に持たせるのでした。

「何です、これは」

うらしま

「浦島の玉手箱だ、あけちゃならねえ、——耳を貸しな、少し含んで貰いてえことがある」

「へエ——」

「たまには耳も掃除そうじして置くんだけ、いい若い者が、こんな汚い耳をして居ちゃ、お琴さんだつて、結構なことをささやく気にもなれないだらうじゃないか」

七

その晩中江川平太夫の家で、大変な騒ぎが起つたのです。

丑刻やつ少し過ぎ、いつぞや中江川平太夫が心配したように、兇賊が例の天窓から、二度目の襲撃をして娘のお琴を縛り上げ、部屋をあさつて、店に寝て居るガラツ八のところまでやって来た

のでした。

遠い有明に透すかした曲者は、ガラツ八の上に馬乗りになると、脇差の一と突き。が、その手は宙ちゆうに淀よどみました。何か見当の違ったものを感じたのでしよう。

「泥棒泥棒ッ」

恐ろしい声で、後ろからわめき立てたのは、床に寝て居る筈のガラツ八です——。いや、ガラツ八は早くもこの襲撃を察し、床の中には枕と座蒲団と雑物ぞうもつを入れ、自分は後ろの戸棚の陰にかくれて、神田中に響き渡るような声を出したのです。

曲者は面喰って立ち上がりました。が、ガラツ八の大音声に胆きも

をつぶした上、近所のざわめき始めたのに気おくれがしたらしく、縁側の戸を開けて、パツと外の闇へ――。

「御用ツ」

そこには銭形平次が待っていたのです。

火のような格闘が一瞬庭に展開しました。曲者の脇差わきざしが、幾度か平次に迫りましたが、得意の投銭がそれを封じて、しばらく睨み合うち、家の中から助太刀のガラツ八が、大音声と一緒に飛出して来たのでした。

×

×

大盗中江川平太夫は、平次と八五郎の手に召捕られ、その夜の

うちに南の御奉行所かりろう仮牢かりろうに送られました。

娘——と称した、妾のお琴は、ちくでん逐電して行方知れず。その後の

取調べで、中江川平太夫は白虎の平太と異名を取った大盗賊で、

三十台にしょうかん傷寒を患わずらって頭の毛は真っ白になりましたが、年はまだ

四十そこそこ、ヨボヨボどころか恐ろしい体術の達人で、猿のよ

うにはり梁を渡り、ひさし庇を飛ぶ術を知って居たのです。

「驚いたね、親分。平太夫が泥棒と、余つ程前から解ったんですかえ」

ガラツ八は絵解が聞きたい様子です。

「自分の家へ泥棒が入ったと訴え出た時から解ったよ。知恵のあ

る者は、自分の知恵に負けるのさ。あんな細工をしなきゃまだ判らずに居たかも知れないが——町内の物持が皆なやられて、裕福と噂のある自分の家だけ無事では変だと思ったのだろう」

「あの時、何んな事がおかしかったんで？」

あしあと

「家の中に泥の足跡のなかったのを第一番に気が付いたよ。自分の家に泥足で入るのはイヤだろうし、それに引窓は内からこわしたんだから、梯子はしごにも及ばなかったんだ——俺がそれに気が付くと、あの後で入った家へは泥の足跡を付けないように用心した上、梯子を一度も使わなかった」

「へエ——」

「お琴を縛るのに、寝巻の上へあわせ裕を羽織らしたのもおかしい。庇かばい過ぎたんだ。それから縄の結び目は、植木屋や仕事師や、船乗や、岡つ引じゃない、あれは小道具の方から来た武道の伝授物だ」

「へエ——」

「俺に泊ってくれと言うのを幸い、手前を泊めたのは、それとなく二人の間を見張らせる為さ。平太夫がそんなに年寄でないことや、あの女は娘でないことも俺は気が付いていたよ」

「——」

「俺に疑われたと思うと、手前に寝酒をあてがった後で家を脱出し、両国の酒屋に押入って、竹乗の倉松にうたが疑いを被せたり、女隠かぶ

居にわざと素足や総髪を見せて、飛んでもない方へ疑いを外そらせる工夫をしたのさ。あの女隠居はなかなか確り者らしいが、その確り者が命がけで耳をすまして居て聞えない物音を、曲者だけが聞いて逃出す筈はない。あわてた振りをして女隠居を殺さなかつたのは、後でいろいろ喋しゃべ舌つってもらいたかつたからだ」

「――」

「一度は易者の大谷道軒を疑わせたが、どんな馬鹿でも、前の晩盗んだ金を、戸締りもない家の仏壇ひきだしの抽斗ひきだしに隠す筈はない」

「あの晩、お琴を嫁に欲しいと言わせたのは？」

「平太夫も近頃少し気をもんで居ると解つたからだよ。何しろ八

五郎といういい兄さんが、女の側に居るんだからね」

「冗談でしょう」

ガラッ八も少し極りが悪そうです。

「いや、冗談じゃない。髪の毛の白い弱身よわみで、それ位のことはあつた筈だ」

「あの包の中は？」

「黄八丈の財布と、手代を刺したあいくちヒ首と、お琴を縛った細引の結び目と、——それから毛の先を切ったかもじさ、それを頭巾の下に冠そうはつって総髪に見せたんだ」

「何処からそんなものを」

「一度使った物を、あれほどの悪党が持っている筈はない。いづれは何処かへ捨てたに違いないと思ったから、かもじ屋から新しく買って来て、ちよいと先を切つて間に合せたのさ」

「へエ——」

ガラツ八も開いた口が塞がりません。

「あの晩、いつもの通り飲んで寝ちや、手前の命はなかつた筈だ、——だから、悪いことは言わねえ、武家の娘などに思いをかけるより、煮売屋のお勘子で我慢して置くのさ、その方が命だけでも無事だぜ」

「へッ」

ガラツ八は苦笑いをして、ピシヤリと額を叩きました。

「煮^{にしめ}べを腹一杯食ってよ、町内のお湯を買い切って三日ばかりつかって見ねえ、こいつは大名にもない贅^{ぜい}だぜ」

平次はそう言つて、カラカラと笑うのです。

(編注)

作品中には、身体障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵―萩 柚月

八五郎の恋

初出―「オール讀物」昭和十三年六月号 文藝春秋社

底本―「錢形平次捕物全集」第四卷
河出書房
昭和三十一年六月三十日初版

編集・発行 錢形俱樂部



錢形俱樂部

<http://www.zenigata.club/>